

| | |
|------------|---|
| 氏名 | 中川典子 |
| 学位の専攻分野の名称 | 博士(社会学) |
| 学位記番号 | 甲社第40号(文部科学省への報告番号甲第333号) |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 学位授与年月日 | 2010年4月14日 |
| 学位論文題目 | 日本人ビジネス・パーソンと韓国人ビジネス・パーソンの自己開示に関する異文化心理学的研究 |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 藤原武弘 (副査) 教授 森久美子 高井次郎(名古屋大学教授) |

論文内容の要旨

申請論文は、比較文化的視点から自己開示という社会行動について研究したものである。自己開示とは、ある特定の他者に対して、自分に関する個人的な情報を言葉で伝達することである。本論文は、日本と韓国のビジネス・パーソンを調査対象に、自己開示者と開示相手との関係性、および自己開示の場という状況の要因に着目し、自己開示に及ぼす効果を定量的かつ定性的アプローチを用いて実証的に検討を行ったものである。あわせて、「自己開示」、「酒席」、「職場の仕事仲間とのコミュニケーション」が調査対象者にとってどのような意味が持たれているのかについても定性的に探索した研究が報告されている。

申請論文は、引用文献を含め全7章、4つの研究から構成されている。まず、第1章の前半では、社会的文化的観点から戦後の日本と韓国の歩みを検討し、自己開示に関する既存の理論について概括している。後半では、状況の要因に着目した自己開示研究の重要性について概括した後、本稿の主題である開示者と開示相手の職場における地位に反映された関係性、および、開示の場としての酒席という状況に着目することにより、日本と韓国における異文化比較研究を実施する理論的根拠について詳述している。第2章では、1960年代から現代に至る自己開示に関する過去の文献調査の結果を、特に本稿の主題と密接に関係する文化、状況、および、ビジネスの観点から概括している。

第3章から第6章までは、本稿における4つの研究の詳細を扱っている。

申請論文で仮定された開示相手とは、同じ職場の地位の異なる同性の親しい仕事仲間3者(上司、同僚、部下)である。まず、研究1では、職場における地位の違いに反映された開示相手との関係性と開示の場としての酒席が個人の自己開示に与える影響について定量的に検証している。その結果、同僚に対して、また酒席という場において自己開示が最も高いことが明らかになった。話題の要因では、「趣味・嗜好」が最も開示度が高い話題であり、「仕事」がこれに続き、その他の話題については有意差が見られなかった。要因間の交互作用の結果、20代は、30代以上に比べて「身体」に関する話題への自己開示が高いこと、一般に私的度合いが高いとされる「身体」に関して、同僚が相手のとき、20代は40代以上の対象者よりも高い開示をすることが明らかになった。また、40代と50代以上の対象者は酒席の場で、「家族・金銭問題」あるいは「意見・態度」に関する話題に関して自己開示が高いことが示唆された。

研究2では、日本人および韓国人ビジネス・パーソンを対象に、研究1と同様、開示相手の職場における地位、酒席という場、話題が個人の自己開示に与える影響について定量的に検討している。こうした要因を取り上げたのは、文献調査において、日本と韓国が垂直的対人関係と酒席という共通の社会的文化的特

徴をもつことが明らかになっていることによる。分散分析の結果、日韓の共通性としては、同僚に対する開示度が最も高く、また酒席における開示度が酒席以外に比べて高いことが明らかになり、研究1で得た結果の再現性が確認された。次に日本と韓国の最大の相違点は、日本人よりも韓国人の自己開示度が高いことである。また、話題に関する顕著な違いとして、日本の場合は、趣味や仕事に関わる話題の他、家族に関する話題で自己開示が高い傾向が示され、韓国の場合は、趣味に続いて、社会問題と仕事に関する話題の自己開示が高いことが報告されている。こうした差異はホール（Hall, 1976）が提唱した「高コンテクスト文化」と「低コンテクスト文化」という考え方にに基づき結果の解釈が行なわれている。日本と韓国は同じ高コンテクスト文化に属するとされるものの、韓国人と比べて日本人の方が高コンテクストの度合いが高い可能性がある、つまり韓国のほうが相対的に低コンテクストで、言語活動に依存する度合いが高いことによるのではとの解釈が行なわれている。

研究3では、研究2の対象者から得た自由記述式回答から、「自己開示」、「仕事仲間との会話」および「酒席」が彼らにとっていかなる意味を内包するものなのかを質的に探索している。分析の結果、日韓ともに「機能と目的」、「認知」、「情動」、「態度」および「実態と状況」に関わる概念カテゴリーが出現した。日韓の共通点として、「自己開示の機能や目的」の中で出現した「理解・共感促進」、「情動解放」、「自己明確化」といった下位項目は、過去の文献調査で指摘された自己開示の機能と目的の下位概念と一致した。また、自己開示という行動に関して、日韓ともに肯定的認知と否定的情動および消極的態度が示された。「仕事仲間との会話」における日韓共通の機能や目的として、「業務関連」、「情動解放」、「対人関係促進」という下位概念が浮かび上がり、また、「仕事仲間との会話」に対する肯定的認知と情動および消極的態度が浮き彫りになった。最後に、「酒席」における機能や目的として、「理解・共感」、「情動解放」、「業務関連」、「対人関係促進」という共通の下位概念が出現し、日韓ともに酒席を肯定的に捉えていることが明らかになった。一方、相違点として、「機能と目的」の下位概念に関して、日本人からのみ「対人関係促進」に関わる回答が見られ、また、「実態と状況」に関しては、自己開示と状況との関連性を指摘した回答が、主に日本人から得られたことから、自分を語るという行為に対して、日本人がより対人志向的、かつ、場依存的傾向にある可能性が指摘された。また、政治内容を含む「社会問題」が話す話題として韓国人からのみ指摘され、研究2の結果の裏付けとなる回答を得た。最後に、対象者の飲酒の程度とアフターファイブの付き合いの頻度から、回答を分析したところ、ある程度の飲酒が情動解放効果を生み、適度の飲酒がカタルシス効果をもたらすことが明らかにされた。

研究4では、日本企業に勤める日本人5名と韓国企業に勤務経験のある韓国人留学生4名を対象に面接調査を実施することにより、自己開示を含む仕事仲間とのコミュニケーション、および、酒席といった要因が個人の中でどのように意味づけされているのかを定性的アプローチを用いて探索している。話す話題や「自己開示の動機と目的」に関するインフォーマントの語りから得られた回答は上記の研究2と3の結果を裏付ける内容であった。日韓の共通点として、上司との会話に関しては、「異なった視点」、「共有」、「援助」が共通概念として浮かび上がり、同僚については圧倒的に「共有」がキーワードとなっていた。主な違いとして、韓国人の人間関係とコミュニケーションの中核をなす同門（地縁・学縁）が、職場における対人関係に大きく関わっていることが、とりわけ、韓国人男性インフォーマントの回答から明らかになった。最後に、日本人インフォーマントからは、企業や社会における個人主義化の傾向が指摘され、韓国人インフォーマントからは、儒教に裏打ちされた垂直的対人関係は継続されるとする見解と、企業および社会に個人主義化の波が押し寄せているとの異なった2つの見解が示された。

第7章では、各研究の要約記述と職場の対人コミュニケーションに関する今後の動向、および、日韓異文化比較研究に対する将来の展望が述べられている。昨今の不況下において日本と韓国の職場における垂直的対人関係、その中で展開される対人コミュニケーション、そして、特に日本において、ますます減少

傾向にある社外での付き合いが今後いかなる様相を呈するののかに関して、縦断的に調査することの重要性が指摘されている。

論文審査結果の要旨

自己開示という概念を手がかりにして、日本と韓国のコミュニケーション行動に共通点と相違点があることを実証的に明らかにした点に申請論文の学術的研究としての意義があると考えられる。その中でも合わせ鏡のように、一見して似通っていると思われる日韓文化の間に微妙な差異があることを明らかにしたことに、地道ではあるが学問的な貢献をしたものと評価できる。なぜなら、この事実はアジア人は皆同じだと思っている、あるいは思いこんでいる西欧人に対する反論にもなりうる研究といえるし、またこれまで「アジア人」としてひと括りに同じカテゴリーに分類され、その微妙かつ重要な社会行動における相違点と類似点が体系的に明確にされてこなかった状況の中で、申請論文により明らかにされた結果は、一つの小さな前進の歩みともいえよう。今後も、日本と韓国を含め、アジアの国々を対象に精緻化された異文化比較研究を実施し、その共通点と相違点を明らかにすることによって、異文化理解を促進してゆく方向性を指し示したという意味で、本論文は斬新性を有していると思われる。従来のオーソドックスな異文化比較研究においては、初めから明らかに統計的に有意差の見られそうな文化間、国家間が取り上げられることが多いのだが、そうした傾向への一つの挑戦ともいえるべき、革新性を本論文は有している。以下評価できる点を具体的に説明する。

1 文化による自己開示の違いや飲酒が自己開示に及ぼす効果を単独に明らかにした研究は散見されるが、日本と韓国といった文化、開示相手の地位、酒席という場という、きわめて重要な変数を組み合わせ、自己開示に及ぼす効果について実証的データで明らかにした研究は従来皆無である。その中でもとりわけ「場」や「関係性」と言う概念は、その重要性が古くはレヴィンによって指摘はされていたが、最近の社会心理学の領域における研究はもっぱら個人の認知や感情、パーソナリティといったマイクロなトピックスに注視され、場や状況の影響力については等閑視されがちであった。そうした個人行動への傾斜に対して、対人関係や酒席といった状況要因に注目し、その場や状況の影響を実証的に明らかにした点で注目に値するといえよう。

2 異文化比較研究における重要な問題点とは、質問紙尺度における計測的等価性である。申請論文の優れた点はこの問題に細心の注意が払われているということである。申請論文においてバック・トランズレーションという手続きは当然のことながら行なわれているが、それに加えて、調査対象者の反応の構えや因子構造における妥当性検討といった精緻な手続きで研究がなされている。たとえば、反応に対する構え (response set) の問題に対しては、分散の違いと5段階尺度の極値つまり1と5の使用数の検討を行い、日韓で差がないことを確認している。また日本と韓国サンプルの因子構造における類似性を検討する手法として係数一致 (Coefficient Congruence) という指標で検討された結果、非常に高い一致率を見出している。このように計測的等価性に関しても最大限の配慮がなされ、同じものさし上で自己開示が測られているということが確認されている。ただ申請論文で採用されている古典的な手法は、潜在特性が推定できないという難点が存在する。今後の文化比較研究は、測定に伴う誤差を考慮した項目反応理論による項目分析や多母集団同時分析といった高度な手法で解析することが望まれる。

3 定量的調査と定性的調査をバランスよく使っている点に研究の特徴がある。日本人の方が韓国人よりも高テキスト文化の度合いが高い、別の表現をすれば言語活動に依存する割合が低いことを、定性的調査でも見出しており、定性的調査が定量的調査を補完しているという堅実な姿が見られる。ただサンプルの代表性やサンプル数の不十分さ、開示相手との親しさの要因を統制していないという問題点、実際の酒

席を参与観察するといった、より多様な調査方法の活用が望まれるが、今回の博士論文口頭試問の答弁からは中川氏がこれらの問題について深い理解と自覚を示していることを追記しておきたい。

審査委員会は、本学位請求論文の内容と研究活動を慎重に審査し、3月1日の最終審査面接の結果から判断し、中川氏は博士（社会学）の学位を授与するのに相応しいとの結論を得たのでここに報告する。